

氏 名 宮代 こずゑ
学 位 の 種 類 博士（ 心理学 ）
学 位 記 番 号 博乙第 2902 号
学位授与年月 平成 31年 2月 28日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当
審 査 研 究 科 人間総合科学研究科
学位論文題目 語義-表現の一致/不一致が語の処理に及ぼす影響

主 査 筑波大学 教授 教育学博士 原田 悦子
副 査 筑波大学 教授 博士（教育学）茂呂 雄二
副 査 筑波大学 准教授（連携大学院） 博士（学術）大山 潤爾
副 査 名古屋大学 教授 博士（教育学）清河 幸子

論文の内容の要旨

宮代こずゑ氏の博士学位論文は、語義と表現の持つ感性情報の一致／不一致が語の認知的処理に及ぼす影響を明らかにすることを目的としたものである。その要旨は以下のとおりである。

（目的）

著者・宮代氏は、人の情報伝達場で発生する言語の情報処理には、言語情報としての意味（語義）だけでなく、表現がもたらす感性情報が深く関わっているとの前提に立ち、言語の表現の形（フォント／手書き文字の形、音声の韻律的特徴／声質等）を変化させて、潜在記憶課題の成績や視線活動などの認知的活動を比較検討することにより、語義と表現の感性情報が一致しているか否かが、情報の受け手である人に対してどのような影響を及ぼすかを明らかにすることを目的とした。

（要旨）

第1部では、著者は本論文の研究背景として、言語が持つ感性情報（表現）とその認知的な効果について先行研究に基づいてまとめ（第1章）、その上で、従来の研究では、表現の持つ感性情報が語義とは独立に研究がなされてきたこと、したがって表現している言語的意味（語義）と表現の感性情報が「一致しているかどうか」の効果がこれまで検討されていないことを指摘し、その影響について明らかにするという本研究の意義と目的を論じている（第2章）。

第2部では、その目的を追究するための5つの実証研究について報告している。まず第3章では、語義とフォント（タイポグラフィ）の感性情報の一致することの効果と、潜在記憶の指標である単語完成課題でのプライミング効果の大きさで比較検討した研究1を報告している。そこでは、まず、語義とフォント感性情報の一致／不一致を実験的に操作するための調査を行い（調査1）、そこで得

られた材料を用いて、プライミング実験を行った（実験1）。その結果、語義とフォントの感性情報が一致する場合には、漢字表記学習条件ではプライミング効果が減少し、逆にひらがな表記学習条件ではプライミング効果が増大することを示した。これらは、二重経路カスケードモデル(Coltheart et al., 2001)に基づき、語義と感性情報が一致すると判断された場合には、当該の感性情報（フォントの場合には視覚的情報）の処理が増大し、相対的に音韻的な処理が減ずることを示すものと考察された。なお、この実験において先行研究と異なり、漢字表記学習条件でもプライミングが生じた原因について明らかにするために実験2を行い、本研究では先行研究と異なり、漢字表記とひらがな表記の条件を混在させた学習条件を設定したために、表記形態が異なってもプライミングが発生することを実証した。

第4章では、研究1で示された語義－表現の一致効果による音韻処理（それに基づくプライミング効果）の減少を、音声情報の付加により回復可能であるかを複数条件下で検討したが、その効果は限定的であることが示されている（研究2：実験3, 4, 5）。次に第5章では、語義と音声表現の感性情報である韻律的特徴との一致／不一致を聴覚提示による単語完成課題も含めたプライミング効果で検討したが、音声のもつ韻律的特徴では語義－表現の一致効果は得られないことが示された（研究3：実験6, 7）。韻律的特徴の表現がもたらす感性情報は、むしろ語義よりも表現者の感情・表現意図を強く示すものと受け止められる（したがって語義の方を変更してしまう）のではないかの考察から、第6章では「表現者による感情・意図による変更とは受け止めにくい」感性情報として声質などを取り上げ、一致効果が得られることを報告した（研究4：実験8a, 8b, 8c）。

ここまでの研究が、潜在記憶における「学習段階での単語提示時の処理における、語義－表現一致効果」をその後に間接記憶課題でのプライミング効果量で測定するという形であったことから、研究5では研究方法を変更し、より直接的に語義－表現一致効果を測定することを目的として、視覚世界パラダイムを用いた視線計測実験を行った（実験9, 10, 11）。そこでは語義とフォント、ならびに語義と手書き文字の一致効果について検討を行い、潜在記憶指標と同様に、表現者の感情・表現意図を反映しにくいフォントでは一致効果が見られるが、感情・表現意図を推測しがちな手書き文字では一致効果が見られないという統一的な結果を得たことを報告している。

第3部ではこれらの実証研究の結果から、単語を処理する際の人の認知的処理では二重経路が存在し、語義と表現の感性情報が一致・不一致することにより、二重経路の中の視覚情報処理と音声情報処理の比重が変化すること、しかしそれが生じる場合には、表現者による感情・意図的な表現操作の可能性が「ない」ことが前提となっている可能性が示唆された。また、このような語義－表現一致効果がもつ個別言語への依存性の可能性、ならびに今後の技術的な発展に対する展開・応用の可能性についても検討がなされた。

（批評）

本研究は単語の処理に関する認知的過程について、表現が持つ感性情報がどのような効果を持つのかを、語義との一致／不一致という独自の視点から問題化し、その効果を潜在記憶ならびに視覚世界パラダイムを用いて、丹念にその実態を明らかにしようとした研究である。その結果として、語義と一致する表現(感性情報)を持たせることで認知的過程の変動が生じることを示すと同時に、その効果の発生条件を明らかにする中で、語義の持つ不確かさ（表現者の存在が意識されるか否かで変動する可能性）を示した。さらに副次的に、聴覚提示による単語完成課題を独自に確立したこと、また、従来は存在しないとされていた日本語表記の異なる場合のプライミング効果が一定の条件下では生じるという新たな発見をもたらしたことなどからも、優れた実験認知心理学研究であると評価できる。

平成31年1月7日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。なお、学力の確認は、人間総合科学研究科学学位論文審査等実施細則第11条を適用し免除とした。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。